■研究十二月往来〈151〉

# 推参と打擲 ―千切木の背景―

岩崎雅彦

狂言「千切木」は、連歌の初心講に呼ばれなかった嫌われ者の太郎が「そのやうに嫌ふ所へはなほ参ろう」（和泉流）と、一同が発句を案じているところに押しかけて、自分を呼ばなかったことを非難し、その上掛物や生け花に難癖をつける。料理ができたら呼びにやるから帰れと亭主が諭しても太郎は帰らない。亭主は業を煮やし、一同に「なう／＼何れも、今度太郎が参つたらば、皆寄つて踏みませう」と呼びかける（大蔵流は「打擲致いてやりませう」）。またやって来た太郎は皆に踏まれ目を回してしまう。これを太郎の妻が聞きつけて「やあ／＼何と言ふぞ、太郎が踏まるゝ。それは誠か。なう腹立ちや／＼、何者が踏みをるぞ」と勇ましく現れる。太郎を見つけた妻が「誰が踏んだぞいやい」と詰問すると、太郎は「男が踏まれてよいものか」と強がるが、袖に足跡がついているのを見つけられ、これは自分には定紋がないので、草履の紋をつけてもらったのだと、言い訳とも冗談ともつかぬ返答をする。討ち果たして来いと言う妻に、太郎は「踏まるれば果たさねばならぬか」と問い、夫の弱腰に妻は「その根性ぢやによつて踏まれをる」と難じる。

それにしても太郎はなぜかくも暴力的な仕打ちを受けなければならないのだろうか。

『今昔物語集』巻二十八―三「円融ノ院ノ御子ノ日ニ曽祢吉忠参レル語」は次のような話である。永観三年〔九八五〕、円融院が子の日の逍遥に紫野に出掛けて船岡山の北に座を設け、上達部、殿上人、歌詠みを列席させた。この時召された歌人は大中臣能宣、平兼盛、清原元輔らの五人で、皆かねて院から廻文を以て召しがあったので、衣冠の姿で参上した。各々が座に着くと、その末座に烏帽子を着て、賤しげな丁子染めの狩衣袴を着た翁が来て座った。この翁は曽祢好忠（曽丹）で、召されてもいないのに推参したのである。好忠は自分は歌詠みとしてその五人に劣らないはずだと言い張って動こうとしない。

若ク勇ミタル下臈・殿上人ドモアマタ曽丹ガ後ロニ寄リテ、幕ノ下ヨリ手ヲ指シ入レテ、曽丹ガ狩衣ノ頸ヲ取リテ、ノケ様ニ引キ倒シテ、幕ノ外ニ引キ出ダシタルヲ、一足ヅヽ殿上人ドモ踏ミケレバ、七八度バカリ踏マレニケリ。

好忠は殿上人たちに襟首をつかんで引きずり出され、一足ずつ踏まれる。ほうほうの体で逃げ出す好忠を随身や小舎人童までが手を叩いて笑い、その話を伝え聞いた人たちも皆笑ったという。「召シモ無キニ参リテ、カヽル恥ヲ見」た好忠は、末の世までも笑われることになった。

曽祢好忠は歌の才能がありながら、丹後掾で六位という低い官位や新奇な歌風のために軽視され、不遇意識を強く持っていた歌人である。『今昔』に記される行動もいかにも屈折している。この話からわかるのは、呼ばれてもいないのに押しかけて座に加わろうとする「推参」という行為が激しい怒りを呼び、推参者は強烈な報復を受けるということである。つまみ出せば済むことであるのに、さらに皆が踏みつけるというのは尋常ではない。秩序が乱されたことによって、その秩序を保っていた静的エネルギーが一挙に動的エネルギーに変化し、秩序を乱した者に対してそれが暴力的な形で噴出するということであろうか。

異類合戦物の絵巻の傑作『十二類絵巻』（詞書は後崇光院〔一三七二～一四五六〕筆）は、十二支の動物と狸に率いられた動物たちとが

戦う物語である。十二神将の使者である十二類が、月を題として歌合を催した。そこに狸を連れた鹿が現れ、自分が判者になろうと言う。犬が鹿の推参を非難するが、竜がこれを許し、鹿を判者として六番の歌合が行われた。その後酒宴が開かれて鹿はもてなしを受ける。三日後十二類は再び歌合を催すことにし、また鹿に判者を頼んだ。ところが鹿は二度続けて判者になることを遠慮してこれを断る。前回鹿のお供について行った狸は、鹿が手厚いもてなしを受けたことをうらやんで、十二類のもとへ出向き自ら判者を申し出る。ところが十二類は狸の差し出た行動に激怒し、兎・馬・牛・鶏がこれを散々に打擲する。絵にはうつ伏せに倒れた狸を、馬が「をれ、踏み殺して失はん」といなきながら、今まさに踏みつぶそうとしている場面が描かれている。

ここでもやはり歌合の場に推参した狸がひどい目に合っている。この後これを恨みに思った狸は狼・狐・熊・猫・いたちなどを語らい十二類にいくさを仕掛ける。狸勢は一旦勝ちを収めるものの、結局十二類に負けてしまう。狸は鬼に化けて十二類を食い殺そうと考え、鬼の姿になって水鏡に我が身を写す。この行動は狂言「釣狐」や「抜殻」にも共通する趣向である。犬に正体を見破られた狸は出家し、腹鼓を打ち念仏踊を踊って暮らした。

『今昔物語集』『十二類絵巻』「千切木」はすべて≪歌（連歌）会―推参―打擲≫という構図でできあがっている。三者に直接の関係を想定する必要はないだろう。これらの背後には、この種の事件が同様の結果を引き起こすという共通理解があるのだろう。「千切木」で亭主が一同に「皆寄って踏みませう」と言うのは、現代の観客にはいささか唐突な言葉で、むしろその唐突さゆえに笑いを起こすのだが、『今昔物語集』や『十二類絵巻』を見ると、推参者は踏まれて当然の重罪なのである。「千切木」では妻とのやり取りにも、踏んだ踏まないということが何度も繰り返されるし（和泉流）、草履の紋の冗談（大蔵流にも）という形でもそのことが強調される。これらも推参者は踏まれるという理解があってのことだろう。なお天正本では連歌の会ではなく酒盛の席、『狂言記』では伊勢講の集まりになっているが、太郎はやはり二三度引き立てられた後に散々に踏まれる。

好忠・狸・太郎は、いずれも推参し、打擲され、笑われる者の役を担わされている。文字・絵巻・演技と、それぞれの形で彼らは笑われる。笑いの芸能である狂言に笑われ役としての推参者が登場することは、ごく当然のことであった。

（法政大学能楽研究所所員）